

新しいグローバル時代の教員に求められる 資質・能力の育成に関する研究 ―日米協働による海外での体験型教育実践を通して―

研究代表者 小原 友行（社会認識教育学講座）
研究分担者 深澤 清治（英語教育学講座）
朝倉 淳（初等カリキュラム開発講座）
松浦 武人（教職開発講座）
松宮奈賀子（初等カリキュラム開発講座）

I 研究の背景と目的

社会のグローバル化が新たなステージに入り、それに伴い全ての教員に求められる資質・能力の一つとして「グローバルマインド」（平和を希求する精神）が必要になってきていると考えられる。それは、グローバル教員に求められる語学力や多文化理解能力の基盤となる資質・能力と考えることもできる。

そこで本研究では、第12回の「学校間交流国際フォーラム」や本年度で10回目の実施となる「体験型海外教育実地研究」（大学院生による海外での体験型の教育実践）の企画・実施と、それらの成果や課題の分析・検討を通して、「グローバルマインド」を備えた教員の育成を目標としてきた本プログラムの教育的効果がどうであったのかを、参加大学院生による自己変容分析を中心に明らかにすることを目的とする。

「体験型海外教育実地研究」は、広島大学グローバル・パートナーシップ・スクール・プロジェクト研究センター（略称はGPSC）が開発し企画・実施しているプログラムであるが、本年度は記念すべき第10回目の実施となる。本年度は、大学院教育学研究科博士課程前期1年の大学院生7名と国際協力研究科博士課程前期2年の大学院生1名の合計8名が登録し、授業開発に取り組んだが、ビザ取得に関する原因不明のトラブルで、1名が渡航直前に辞退することになり、米国での授業実践は7名となった。

本年度も例年のように、4～8月の事前の教材研究、9月16日～26日の米国での教育実地研究（ノースカロライナ州グリーンビル市内の公立のウォールコート小学校・エルムハースト小学校・C.M.エップス中学校での授業観察および教育実習とイーストカロライナ大学での大学院授業の参加と受講大学院生との交流、州都ローリー市内のイクスプローリス小学校および同中学校での授業見学と校長・教員との意見交流、そして博物館を中心とした教材調査、首都ワシントンDCでの多文化理解学習のための教材調査）、そして帰国後10～11月の事後研究による教材の完成とレポート作成、そして12月14日の成果発表会となっている。

また、本年度も、7月16日に開催された「グローバル時代における教員養成の将来～体験型海外教育実地研究からの提案～」をテーマとした第12回の学校間交流国際フォーラムのために来日してもらった、GPSCのパートナー校であるイーストカロライナ大学教育学部のサンドラ・ウォーレン先生、実習校であるエルムハースト小学校のアンドレア・フレミング先生とケイシー・ウェスター先生の協力を得て、7月17日に行われた授業研究ワークショップにおいて、事前の指導案検討を綿密に行うことができた。

なお、本年度の取り組みについては、10回目の実施ということもあり、グリーンビル市

内の新聞社「The Daily Reflector」の取材および報道もあり、現地でも注目された。

(小原友行*・深澤清治・朝倉 淳・松浦武人・松宮奈賀子)

Ⅱ 平成 28 年度「体験型海外教育実地研究」の概要

1. 全体日程

2016 年度、本授業科目の実施状況（全体日程）は以下のとおりであった。

- 4 月 7 日（木） 本授業の概要と計画説明
- 4 月 27 日（水） 授業研究テーマ事例の考察および渡航のための諸手続きの確認
- 5 月 23 日（月） 授業研究テーマ案の交流・設定
- 6 月 7 日（火） 学習指導案の検討(1)
- 6 月 16 日（木） 学習指導案の検討(2)
- 7 月 11 日（月） 学習指導案（英語版）の検討(1)
- 7 月 12 日（火） 学習指導案（英語版）の検討(2)
- 7 月 16 日（土） 第 12 回学校間交流国際フォーラム参加
- 7 月 17 日（日） 2016 年度「体験型海外教育実地研究」授業研究ワークショップ参加
- 8 月 4 日（木） 学習指導案・教材・教具の検討および渡航のための諸手続き
- 8 月 30 日（月） 準備状況の確認，教材集・報告書の作成・報告会についての確認，渡航に関する書類提出
- 9 月 12 日（月） 渡航前最終打合せ
- 9 月 16 日（金）～9 月 26 日（月） 米国における「体験型海外教育実地研究」
- 12 月 14 日（水）「体験型海外教育実地研究」研究成果報告会

2. 現地での日程

- 9 月 16 日（金） 広島出発，成田泊
- 9 月 17 日（土） 成田出発，米国ノースカロライナ州グリーンビル到着
- 9 月 18 日（日） 授業準備および授業打合せ
- 9 月 19 日（月） グリーンビル現地学校訪問（観察），イーストカロライナ大学教材開発センター見学，同大学学生との交流
- 9 月 20 日（火） グリーンビル現地学校訪問（授業実施）
- 9 月 21 日（水） イーストカロライナ大学の授業参加，ローリーへ移動
- 9 月 22 日（木） イクスプローリス中学校・小学校見学
- 9 月 23 日（金） ローリー市内（博物館等）研修，ワシントンへ移動
- 9 月 24 日（土） ワシントン（スミソニアン博物館等）研修
- 9 月 25 日（日） ワシントン出発，機内泊
- 9 月 26 日（月） 広島到着

3. 参加者およびグリーンビルにおける配置

本年度の「体験型海外教育実地研究」の授業には 8 名の院生が参加したが，米国で授業を実施することができたのは 7 名であった。なお，参加大学院生の渡航費用や滞在費はすべて自己負担となっている。

参加学生の現地での学校配置，担当者，参加者，引率教員は以下のとおりである。参加者は事前に準備した授業を各校において実施した。

【エルムハースト小学校（K-5）】

実施校担当者：ワンダ・ウィリアムズ先生

参加者：志摩愛里・吉川友則

引率者：小原友行・朝倉淳

【ウォールコート小学校（K-5）】

実施校担当者：シンディー・ワトソン先生

参加者：平野優輝・阿比留久美

引率者：松宮奈賀子

【C.M. エップス中学校（6-8）】

実施校担当者：アリソン・キリー先生

参加者：奥田麻衣子・茂松郁弥・山本稜

引率者：深澤清治

4. 本年度の実施授業

平成28年度の「体験型海外教育実地研究」において開発・実施された授業は，表1のとおりである。

表1 実施授業の学年と教科等

学生	指導学年	教科等，題材・テーマ*
A	3	異文化理解 Let's Play "Mamemaki"!!
B	3	図画工作科 Let's make a story of the moon!
C	4	異文化理解 Let's have an experience of Japanese footwear culture!
D	5	図画工作科 Let's design Olympic emblems of Greenville!
E	5	異文化理解 Let's write messages to Japanese school children
F	6	異文化理解 Let's think about original local "ekiben"
G	6	国際平和教育 Sustainability of World Peace Day
H	8	異文化理解 Let's play "shogi"!

※「教科等，題材・テーマ」は，参加者（授業者）が付したものであり，授業を実施した当該校にとっては教育課程外の投げ入れ授業として位置づけられるものである。

※参加者Aは，教材づくり等，渡航直前の準備までは行ったものの，最終的に参加を辞退した学生である。

（松浦武人*・小原友行・深澤清治・朝倉 淳・松宮奈賀子）

Ⅲ 平成 28 年度「体験型海外教育実地研究」参加者の成果と自己変容

1. 本年度の参加者の成果

本年度の参加者 8 名の自己申告による成果をまとめると、表 2 のようになる。

表 2 平成 28 年度参加者による「体験型海外教育実地研究」の成果

	自己変容
A	<p>実際に授業を行っていないため、指導案作成の過程と交流フォーラムを通じた成果と課題を述べる。成果としては、大きく 2 点ある。1 点目は、日本の文化を再確認できたことである。アメリカの子どもたちに「日本の伝統的な文化」を感じてもらう授業を計画していく過程で、日本の文化とは何なのか、その文化をどのようにしたら面白く体験的に理解してもらうことができるのかを考えることが出来た。それを通して、日本の文化を再確認できたと考えている。2 点目は、実習校に先生方にアドバイスをもらい、アメリカの子どもたちの実態を加味しながら指導案を作ることができた。アメリカの子どもたちの語彙力や、興味関心などを把握できたことで、より子どもたちに分かりやすいように指導案を再構成することが出来たと考えている。</p>
B	<p>成果物を見ると、多くの発想ができていた児童とあまりアイデアがでなかった児童が見受けられたが、児童全員がオリジナルの物語を想像し、作品を完成させることができたことがよかった点として挙げられる。また、鑑賞の段階では、完成した自分や友達の作品を見て楽しむ姿が見受けられ、「すごい」、「きれい」などの声が多く上がっていたため、多くの児童が月のよさや美しさ、友達の作品の面白さに気付くことができていたのではないかと考える。</p>
C	<p>本授業における成果として、子どもたちに下駄という日本の履物文化を知ってもらうことができたという点が挙げられる。実施クラスの子どもたちは、「日本人がどのような靴を履いているのか」ということに関心をもっており、日本人の多くが普段はアメリカの人たちと同じような靴を履いているということを伝えるとともに、日本の特徴的な履物として下駄を紹介することができた。また、下駄を実際に履いてみるという経験をしてもらうことで、経験的に下駄がどのようなものであるかを知ってもらうことができた。子どもたちは、日本の文化に対して最初からある程度の関心を持っていたが、経験をすることでより一層関心が高まったのではないかと考える。</p>
D	<p>本授業の成果としては、スライドに絵やイラストを多く取り入れていたこと、また具体物を多く提示したこともあり、私のつたない英語の説明だけでも子どもたちがこの授業の意図を理解してくれたことである。子どもたちは、「グリーンビルの地域性」と「オリンピズム」の 2 つの要素を反映し、想像力豊かなエンブレムをデザインしてくれた。また、子どもたちが考える時間を確保し、意見を出してもらう場面を設定するなど子どもたちと関わる機会を取り入れることができたことも成果の 1 つである。</p>
E	<p>今回の体験型海外実地研究における成果は、自分の行った授業を通して、実際に日本の小学生とグリーンビルの小学生でメッセージの送り合いという、日米の交流を行えたことである。普段生活している中で、外国に住んでいる人と交流するという機会は多くはない。また、自分たちの国や地域について話し合う機会もほとんどない。そのような中で、授業の中で間接的にはあるが、日本の小学生は日本のいいところ</p>

	<p>についてアメリカの小学生に向けてメッセージを書き、アメリカの小学生は日本の小学生からのメッセージを読み、それに対する返事を書くことで、交流することができた。このことが体験型海外実地研究の1番の成果である。</p>
F	<p>成果は2点ある。1つは、日本の食文化に触れてもらうことの意義である。食文化は直接体験が出来ないが、写真を見せるだけでも、生徒は関心を持って話を聞いていた。これは、「食」という生徒達に身近なものを取り上げているため、食べ物の共通点・相違点が分かり、関心や驚きを持って取り組めてからだろう。2点目は、日本の文化を通して自分の文化を見直させられた点である。グリーンビルの駅弁を考えることを通し、「自分が普段食べているものは何か」を意識的に見直しつつグリーンビルを宣伝する駅弁を考えることができた。</p>
G	<p>成果としては、生徒にとって図で表記するという作業は、普段の学習から随分と慣れた様子が伺えた。この授業は、案の中でのメインとは、異なったが、この活動は、してよかったと感じる。</p>

2. 本年度の参加者の自己変容

また、本年度の参加者による「自己の変容」についての記述内容を紹介すれば、表3のようになる。

表3 平成28年度「体験型海外教育実地研究」における自己の変容

	自己の変容
A	<p>体験型海外実地研究に参加して、参加前と大きく変わった点が1点ある。それは、海外で実際に行うことを想定して指導案を作ったということ自体である。これまで、アメリカの実践を見たり、読んだりしたことはあったものの、自分自身がアメリカで授業を行うことを想定して指導案を作成することがなかった。アメリカの子どもたちが求めているものは何なのか、自分が伝えたいことは英語で伝わるのか、ということ意識しながら指導案作成を行った。このように、指導案作成を行う際に、今まで考慮することがなかったことを考慮に入れながら指導案作成が出来た。そのため、「日本で教育を行う」という当たり前だった自身の中にある概念自体を揺さぶられるプロジェクトだった。今度は、実際にアメリカに行って実践を行いたいと思っている。</p>
B	<p>アメリカでは、授業実践以外にも学校の先生方や児童と英語で話す機会が多く、英語が苦手な私にとって、最初は伝えたいことが伝わらないもどかしさや聞き取れない悔しさが大半であり、話すことに消極的になってしまっていた。しかし、コミュニケーションを取っていくうちに、私の拙い英語を一生懸命理解しようとしてくれる先生方や児童の姿が本当に嬉しく、もっと伝えたいという気持ちが強くなり、こうしたら伝わるかもしれない、こういう言い方をしたほうが分かりやすいかもしれないというように積極的に英語で話すことができるようになっていった。コミュニケーションにおいて重要なのは、お互いが理解し、理解されようとする気持ちであり、またその気持ちを相手に示すことであると学ぶことができた。言語やバックグラウンドが違ってそれが弊害ではなくむしろ知らないからこそその発見や楽しさがあることも今回の経験から実感することができた。</p>

C	<p>教育観の変容としては、授業における指示の準備の重要性である。特にアクティビティを行うときに、どのような指示をだして活動を行わせるのか、活動中にどのような声掛けを行うと効果的であるかなどを、事前に綿密に考えておくことの重要性に気付いた。今回は特に英語であるということも含めてそこに困難さを感じたが、これは日本における授業でも重要となるだろう。これから、アクティブ・ラーニング型の授業が多くなることが予想される中で、教師の指示や声掛けというものは今までよりもより一層重要になっていくのではないかと考える。</p> <p>異文化の子どもたちを相手に授業をすることは、今回はじめての経験であった。これからの教室のグローバル化が予想される中で異文化や多文化の中での教育というものを考えさせられた。</p>
D	<p>私がアメリカの小学校を訪れて特に驚いたことは、「褒め」の量である。授業中に先生方が子どもたちを褒めることは当たり前で、子どもたち一人一人の発言に対し丁寧に対応していた。このように普段から褒められ慣れている子どもたちの前で授業をすることに、はじめはとても不安だったが、せっかくアメリカで授業をするのでアメリカの良さを自分も取り入れてみようと思い、褒めることと子どもたちの発言には必ず一言コメントを返すことを目標に授業に臨んだ。慣れないことに英語で臨むということは簡単ではなかったが、褒め言葉を使ったり、答えてくれた子に全員で拍手をするように促したりすると、子どもたちがたくさん挙手をしてくれるようになった。日本とは違うからと異なる文化を拒絶するのではなく、現地の文化を取り入れながら授業実践ができたことで、新しいことへ挑戦することの楽しさを知り、これから何事にも積極的に挑戦しようと思えるようになったことが大きな変容である。</p>
E	<p>体験型海外実地研究の中で、アメリカの小学校や中学校の様々な授業や学校環境を観察することができた。この経験から自分の中の「授業」に対するイメージが大きく変わった。現在、日本においてもアクティブ・ラーニングなどが取り入れられているが、アメリカではそれが当たり前に行われていた。教師がしゃべる場面が少なく、児童、生徒同士のグループで話し合ったり、考えたりする風景が数多く見られた。そして、自由に他のグループに行ったり、自分の考えを主張したりしていた。今まで自分の中には、自分自身が小学生や中学生の頃に受けてきた授業や教育実習で見てきた授業が、「授業」のイメージの多くを占めていた。それらが、授業の型を作ってしまったように感じた。観察した授業の中には、椅子や机のない場所で算数をするものもあった。アメリカでの授業観察などを通して、もっと自由に子どもたちが活動し、学べる授業をしたいと思うようになった。授業はこういうものだという先入観にとらわれることなく、児童のアクティブな活動をより一層取り入れていきたい。</p>
F	<p>体験型教育実地研究を通して、表現力がついたように思う。英語力が拙いこともあり、うまく言葉で表せなかったり、英語が聞き取れず上手く会話ができなったりする場面が多くあった。その状況で、「今の語彙力でどのように言えば良いか」「言語以外で伝える方法はないか」といったことを常に考えながら行動していた。何度も失敗や反省を繰り返して、相手の言葉に対して相槌を入れながら会話をしたり、ジェスチャーを交えつつ言いたいことを伝えたり、表情豊かに話を聞いたりすることで、コミュ</p>

	<p>ニケーションをとったり思いを伝えたりすることができることが分かった。今まで私は表現することが苦手であったが、実地研究を通してこのような非言語の表現力が高まったように思う。</p>
G	<p>私が今回、授業をさせて頂くに当たって、授業前の打ち合わせ時間に、受け入れ校の先生たちは、自分が何をしようとするのかをわかってくださっているものだという考えが、非常に甘かったと反省している。そこで、言葉にして表現したり、紙ベースのものを見せたりしながら、確認を一緒にしていき、意見をもらうべきであった。この苦い経験から学んだ経験は、日本に帰ってきてから、非常に役立っている。「言わなくても理解している」と思っているのは、自分だけで、相手が日本人であっても言わなければ、通じていないことがある。だから、自分の思いは、秘めるのではなく、表現することだと学んだ。</p> <p>また、滞在中訪れた美術館や博物館は、人々にとって身近な場所（生活の一部）なのではないかと感じた。1度だけ訪れたただけけど、また行ってみたいなものも多く、時間内で回れないほどの壮大なものであった。身近な存在だがゆえに、それぞれの美術館や博物館では、ゆっくりと休められるようになっていたり、また、これらが宇宙に行きたいなどという子供を育てたりするのではないかと教育は、子供たちを取りまく社会や環境によって、変化もするのではないかと思った。教師として、学校外のことにどれだけ目を向け、子供に発信できるかが問われるのではないかと考える。</p>
H	<p>教育観の変容として、生徒の状況を踏まえた生徒の教材研究の重要性を感じたことである。そのためにも、今あるもので何をどのように活用すれば生徒にとって良い授業ができるのだろうかと考えていくことが肝心であると思った。</p> <p>また、アメリカでは、日本と違うことが多く戸惑うことがあった。しかし、それを受け入れて楽しむ心の余裕やおもてなしの精神の重要性を実感した。グローバル化が進む現代社会に必要であろうそのような精神を会得したいと考え、教師になったら伝えていきたいと考えた。</p>

3. 参加者の自己変容についての考察

例年の参加者と同様に「言語と非言語によるコミュニケーション」と「国境や言語を超えた「人」としての思いやりという共通点」に関して、自己変容につながる学びがあったことが明らかになった。

ほとんどの学生が自身の英語力に不安を感じており、英語で授業を行うことは、自分の英語が伝わるか、児童・生徒の発言を理解して、次の授業展開に結び付けていくことができるかという大きな心配のあるものであったと思われる。この点においては最後まで「もっと英語が流暢であれば」という課題を残した学生も多かったが、一方で、英語ができないからと消極的になるのではなく、「気持ち」でつながろうとすること自体の重要性に気付いた学生が多かった。ある学生からは「言語や文化背景が異なっても、それは弊害ではなく、むしろ知らないからこそその発見や楽しさがあることを本体験から実感した」との感想が寄せられた。参加学生がこのような思いに至った背景には、現地の先生方が自身の時間や経費を惜しみなく費やして、学生のサポートに当たってくださったことがある。言葉や

文化の壁を越えて交流することがもたらす喜びや、伝えきれなかった悔しさなどの思いを忘れずに、英語力向上への努力と、他者と関わることのすばらしさを教壇に立った時に彼らの児童・生徒に伝えていってくださることを強く望みたい。

さらに、学生にとっては「イメージ」「固定観念」を良い意味で壊す機会になったことが伺えた。授業とはこのようなものである、という授業イメージを学生は自分自身の学習経験から作り上げている。日米いずれの授業の在り方がより優れているかという問題ではなく、異なる指導を見、体験することにより、既得のイメージを超えた授業実践の可能性を考える機会になったものと思われる。ほめ方、ICTの活用の仕方、思考のさせ方等、日々の授業実践に直結する指導技術等について「生」の実践、実態を学べたことは、これからの授業づくりに大いに役立つものであると考える。

(朝倉 淳*・松宮奈賀子*・小原友行・深澤清治・松浦武人)

IV 平成 28 年度「体験型海外教育実地研究」の成果と課題

10年目を迎えた今年の体験型海外教育実地研究も無事に終わり、全員が大きな成果を挙げると同時に、現地での授業を目指して、授業計画から実践を通して、新たな課題を見つけて戻ることができた。ひとつの節目を振り返ってみると、このプログラムに息づいている独自のコンセプトがあるように思われる。

第1に、教材開発において誰もいわゆる「レディメイド」の教材を使わず、すべて一から創り出していく「オーダーメイド」の教材づくりを目指したことである。近年では教科書や市販教材だけでなく、インターネットをはじめ、至る所に教材資料はあふれている。それをそのまま使うのではなく、自らの視点で改作しつなぎ合わせ、手作りの教材づくりを図ってきたことは、本プログラムの伝統となっている。教材づくりの原点に立ち返り、アメリカの子どもたちにどうしたら受け入れられるかを常に考え、また英語という高いハードルを何とかクリアしながら、教材や活動を組み立てていく取り組みは、多様化する日本の教育環境の未来に適合するための力になるであろう。

第2に、教科の枠組みを超えた取り組みとなっていることである。参加した大学院生たちは、それぞれ社会科、理科、美術科、などの専門教科を持ち、教材研究にたけた集団である。それにも拘わらず、敢えて自らの専門教科を教える (teach a subject) という枠組みを越えて、思考を揺さぶり深めるような活動を通して教科知識の伝達に止まることなく、教科知識・技能を活用、援用した学びを促進すること (do a subject) を目指したことである。これは現在、脚光を浴びている知識注入から能動型教育を目指すアクティブ・ラーニングや、内容言語統合学習 (Content Language Integrated Learning 通称 CLIL) の方向を先取りしたものと言えよう。

今後、本プログラムが既存の教科の枠組みや教科観を残しながらも、新たな教材や教育プログラムの開発に果敢に取り組むためのステップになることを期待したい。

最後に、このプログラムを支えてくださった多くの同僚と友人達に深く感謝したい。まずは、アメリカ合衆国ノースカロライナ州での受け入れ側であるイーストカロライナ大学 サンドラ・ウォーレン先生には7月の広島大学でのフォーラム及びワークショップ参加、そして9月の実地研究の受け入れと、それに伴う現地教員とのパイプ役として、まさに滅私的なご協力をいただいた。広島大学との交流にかける熱い思いとご尽力がなければ、10

年間の歩みは途切れていたことであろう。また、彼女の呼びかけに快く応じて、南部州のホスピタリティで私たちの訪問と交流を歓迎してくださったグリーンビルとローリーの学校の先生方そして生徒達にもお礼を申し上げたい。このような交流の礎になったのは、かつて広島大学教育学部に留学され、その後、イーストカロライナ大学に赴任以降、ずっと教育を通じた日米交流にかかわり続け、太平洋を教育という橋でつなごうとして志半ばで倒れた故ドン・スペンス博士の願いであった。広島大学 GPSC は小原友行教授をはじめ各メンバーとスペンス氏との小さなフレンドシップから始まり、10年を経て太いパートナーシップに成長した。今後は、このプログラムを体験した若き教育者たちが、日本さらには世界各地で教育のリーダーシップをとることができる人材として活躍されることを願ってやまない。

(深澤清治*・小原友行・朝倉 淳・松浦武人・松宮奈賀子)

V おわりに～「体験型海外教育実地研究」の教育的効果～

これまで10回にわたる「体験型海外教育実地研究」の実施を通して実感することができた教育的効果は、大きく次の3点にまとめることができよう。

第1は、参加大学院生のカリキュラム・学習材・学習活動の開発力が向上することである。英語力への不安から、実際の授業を行うに当たっては、言葉でごまかせないという状況に追い込まれることになる。その結果として、日本での教育実習では見られない学習材開発や学習活動の工夫が求められることになり、大学院生は懸命に考えることになる。そのことは、結果として指導力の向上につながると考えられる。

第2は、非言語によるコミュニケーション力の向上である。わずか40～50分の授業であっても、多文化な世界の中では意図的に自分自身のテンションを上げることが求められる。また、何とかして自分の思いを伝えたい、相手の思いを理解したいという気持ちになる。その結果として、自分自身の言葉に頼らないコミュニケーション力を高めようとするモチベーションが生まれることになる。

そして第3は、自己変容にも共通してみられるように、「グローバルマインド」（平和を希求する精神）を確実に意識するようになることである。現地の小・中学校の授業の中で、同じ教員を目指す大学院生や日本語に関心を持つ大学院生とのコミュニケーションの中で、さらには「グローバルマインド」を備えた中学生の発言に接する中で、自身のそれを振り返るようになる。現地での「体験型海外教育実地研究」は、わずか10日間であるが、それは自己変容の10日間でもある。

(小原友行*・深澤清治・朝倉 淳・松浦武人・松宮奈賀子)

参考文献

- 1) 小原友行・深澤清治・朝倉淳・神山貴弥ほか「大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究」、広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第13巻、2007、pp.43-56.
- 2) 小原友行・深澤清治・朝倉淳・神山貴弥ほか「大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究Ⅱ」、広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第14巻、2008、pp.39-53.

- 3) 小原友行・深澤清治・朝倉淳・松浦武人ほか「大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究Ⅲ」, 広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第16巻, 2010, pp.95-104.
- 4) 小原友行・深澤清治・朝倉淳・松浦武人・松宮奈賀子ほか「大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究Ⅳ」, 広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第17巻, 2011, pp.155-168.
- 5) 小原友行・深澤清治・朝倉淳・松浦武人・松宮奈賀子ほか「大学院生によるアメリカの小中学校における体験型海外教育実地研究Ⅴ」, 広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第18巻, 2012, pp.129-140.
- 6) 小原友行・深澤清治・朝倉淳・松浦武人・松宮奈賀子ほか「大学院生によるアメリカの小中学校における体験型海外教育実地研究Ⅵ」, 広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第19巻, 2013, pp.259-269.
- 7) 小原友行・深澤清治・朝倉淳・松浦武人・松宮奈賀子・植田敦三ほか「大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究Ⅶ」, 広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第20巻, 2014, pp.161-181.
- 8) 小原友行・深澤清治・朝倉淳・松浦武人・松宮奈賀子ほか「大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究Ⅷ」, 広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第21巻, 2015, pp.143-161.
- 9) 深澤清治・小原友行・朝倉淳・松浦武人・松宮奈賀子ほか「大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究Ⅷ」, 広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第22巻, 2016, pp.251-268.